

コロナ禍の下、組体操から続く「集団マット」の実践

牧野満（奈良・下田小学校）

1. 組体操を救うてやった

昨年の年度末会議では組体操を学校からなくそうという話合いが持たれました。組体操を巡る論議はこの時が2回目で、前回の会議で意見がまとまらないから、最後は校長の判断を仰ぐことになりました（変な話ですが）。

その場でこう発言しました。「私は組体操には全くの思い入れがなく、運動会であれば民舞を行ってきた方です。」と断りを入れた上で、「しかし、組体操をこの学校からなくしても良いのでしょうか？批判されているのは巨大化・高層化に向かう組立体操であって、組体操ではないはず。3年前に6年生を担当した時は、丁度八尾市中学校で起こった組体事故の翌年でした。組体バッシングが全国的に起こる中、巨大化・高層化に向かわない組体操を『組体表現』という形で創ってきました。そういう経緯があるのにも関わらず、今年の6年の意向だけで組体操をなくすというのは甚だ疑問です。」と。この時私は5年生の担任でした。その6年の教師たちは、子どもがひ弱だとか自分たちには指導した経験がないという理由でダンスをやったのです。組体操をする・しないの判断は当該学年が決めたら良いことであって、しなくても全く構わないのですが、自分たちは指導もしていないくせに組体操をなくそうという発想はどこから出てくるのか？組体操をやめて今後はダンスをしようなんてよくぞ言えたものだと思います。

校長に対しても「組体操が子どもにとってどうなのかということをお問はず、結局は教師の保身、学校の事なかれ主義なんでしょう！」と続けて言うと、「事なかれ主義」という言葉にカチンと来たのか？「事なかれ主義はちがう！」と語気を強めて怒っておりました。しかし、その後の言葉は続きません。そして、最後には、「組体操を認めたらいいのやろ！」という投げやりな言葉を発し、組体操は生き残ったのでした。（私の言ったことは凶星やろ！反論できるものは何ももつとらんと言うことや！）と腹の中では勝ち誇っていました。

結局、「受け持った学年が子どもの実態を見て組体操をする・しないの判断をする」ということに落ち着きました。こんな当たり前のことを会議で長時間かけて話し合うこと？と、本当に情けない気持ちで一杯でした。

この会議の中で、一番残念に思ったのが、2016年度に同じ6年で「組体表現」を中心になって作ってきた教師が、「安全面から組体操をなくそう」と発言していたことでした。「あなたが中心になって組体表現を作ってきたのではないのか！」と名指しで批判しました。同調者は少なく、自分の職場での位置がよく分かる大変重苦しい会議でした。しかし、何はともあれ、学校から消されかけた組体操を私が救うてやったのでした。

2. もう一度「組体表現」をやろう

再び申し上げますが、私には組体に対する思い入れは全くありません。しかし、子どもの安全を本気で考えていると言うよりは、「ケガして言われたくない。報告書が面倒だから」などの教師のご都合主義によって全国的に組体操がなくなっているとすれば、それは大変憂うことだと思います。何故安全な組体操を追求しようとししないのか？今こそ、組体操を行う意味があるのではないかと思います。

組体操をなくす論議があったその年、組体操をしなかった6年生のダンスは不評でした。それを見ていた5年の保護者（現6年の保護者）からは、「来年こそは組体を是非やってほしい」と最後の学級懇談会で懇願されました。そして、今年度、6年を持ち上がった段階で、運動会では組体表現をしようという強い思いをもっておりました。

3. 組体表現を振り返る（2006年度）

① 2016年…「組体表現」を行う

4年前の2016年度に行った「組体表現」を振り返りたいと思います。この年も6年生を担当していました。前年に八尾市の中学校で起こった事故が元となり、組体操へのバッシング、学校の事なかれ主義が横行して、組体自粛ムードが高まり、運動会で組立体操を中止する学校が増えました。私は、これまでの運動会では、民舞（民俗舞踊）を行ってきた方であり、また、号令一下の組体操は好きではないため、組体操への思い入れは全くありませんでした。しかし、組体操は子どもにとってどうなのかという教育的価値を考えるでもなく、止めた方が無難という自粛ムードが殊更おかしく、その年は、是非「高度化・高層化に向かわない組体操をしよう」と思いました。「組体操」でもなく「組立体操」でもなく、敢えて「組体表現」としたのです。「組体表現」に至るまでにどんなことがあったのか、2016年の運動会に至るまでの過程をお話したいと思います。

②「組体操」と「組立体操」は違う（用語の使い分け）

「組体操」・・・演技全体の流れを指し、複数で行うことによって一人では得られない効果をねらうものです。マスゲームなどもここに含まれる。

「組立体操」・・・空間表現を構成する技そのものを指しています。（スタント）問題となっているのは、巨大ピラミッドに代表される巨大化・高層化に向かう「組立体操」であって「組体操」ではありません。

「組体表現」・・・2016年に実施したのは「組体表現」であり、「組体操」に音楽を用いて一つ一つの技の美しさ、同調性の美しさを組体操の中心に据え、一つの作品として表現しました。

③組立体操の巨大化・高層化

2010年の朝日新聞には、「絆の10段ピラミッド」というタイトルで兵庫県の中学校の実践が載せられていました。カラー写真で掲載された十段ピラミッドには驚かされたものです。目を引きつけたのは何と言ってもその高さでした。新聞では、生徒の可能性を限りなく広げ、これだけの指導ができる教師やその学校の取り組みは素晴らしいと絶賛されていました。校長のコメントも載せられています。「一步間違えれば大きな事故になるが、安全性を高めるために工夫をすれば実現できる。生徒たちが感じた代え難い感動や達成感、その後の人生に必ず生きると信じている」と。この報道を契機に組立体操の効果が広く知られることとなり、組立体操は巨大化・高層化を目指すようになります。



④組立体操のマニュアル化

組立体操の巨大化・高層化は2000年前後から既に進んでいました。官民間問わず、組立体操の講習会が開かれ、DVDの付いた書籍が販売されていました。ネットを通して指導法が動画で視聴できることから、組立体操のハウツーが広まって行ったのでした。高さに向かう組立体操の指導法をしっかりと学んだり、組立体操を含めた運動会（体育祭）の取り組みを学んだりするというよりは、見映えのあるもの、人を惹き付け完成度の高いものが求められ、「短時間でできる組立体操」という風にパッケージ化され、広められて行ったのです。これに類する書籍もたくさんありました。

⑤組立体操の事故から急転

2015年度八尾市の中学校で起こった組立体操事故をきっかけに組立体操に対する見方は一変します。その映像がネット上に流れ、幾度となく動画が再生されることになりました。生徒の身体を心配したり、安全対策に何が欠けていたのか、その参考として視聴したりすると言うよりは、興味本位の視聴が多く、それが怒りへと転じて行ったのでした。マスコミも無責任なもので、今度はバッシングの側に回ります。「組体操の達成感、一体感は生涯忘れられないもの」と、かつて絶賛していたにも関わらず、組体操を疑問視する研究者をゲストに招き、批判の側に立って報道しているのです。

全ての学校の組体操が高層化、巨大化しているわけでもないにも関わらず、中学校の組体事故と一色単にされてしまいました。組体操の否定的な面が語られ、組立体操が悪であるような風潮ができてしまいました。それに呼応するかのように、大阪市教委はすぐに「ピラミッド」「タワー」禁止の決定をしました。各教育委員会などもそれに続いて規制をかけると言った事態に発展しました。教委の対応には賛成の声が多く、「事故が起きる前にもっと早く規制すべきだった」などの意見が多数を占めました。それに対し、「何でもかんでも管理するのはどうか」「教育委員会が規制すべきことなのか」という反対意見もありますがごく少数でした。

奈良県でも春の運動会を控えていた4月に県教委の方から通達が出されました。「・・・極めて危険度の高い多人数で立体的に積み上げるピラミッドや高さのあるタワーなどについては、授業の発展的な内容の範囲を逸脱するとともに、完成を目指すには正しい練習段階を踏むことが必要になり多くの授業時間を要し、かつ、完成させることを第一義として授業に取り組むことは学習指導要領の趣旨にそぐわないことから、不適切と判断する。」という内容でした。何段であれば安全で、どの高さであれば良いのか示されていません。大阪市教委のように具体的に技の規制はないのですが、暗にピラミッドやタワーへの規制でした。

<教育委員会の見解> 4月の中旬。奈良県教委の方から次のような通知がありました。(H28.4.18)

運動会・体育大会は、各学校において、学習指導要領における特別活動の〔学校行事〕(3)健康安全・体育的行事として位置付けられており、日頃の学習の成果を発表する場とされている。このことから、運動会・体育大会で実施する組体操は、学習指導要領に示された「体育科」及び「保健体育科」における授業実践の成果を発表するものと捉える。

組体操の内容は、「体育科」及び「保健体育科」の授業で実践した「体づくり運動」等の内容とその発展的な内容が適切である。しかしながら、極めて危険度の高い多人数で立体的に組み上げるピラミッドや高さのあるタワーなどについては、授業の発展的な内容の範囲を逸脱するとともに、完成を目指すには正しい練習段階を踏むことが必要となり多くの授業時間を要し、かつ、完成させることを第一義として授業に取り組むことは学習指導要領の趣旨にそぐわないことから、不適切と判断する。（※通知文書そのまま。下線部は教育委員会の強調点）

「体づくり運動」と組体操との関連を示しているが、これは明らかに無理があります。組体操が学習内容を逸脱していることを示すための論拠として、学習指導要領を持ち出しているのですが、「体づくり運動」に組体操の例示はどこにも見あたりません。これは内田良（『教育という病』／光文社新書）が指摘するように「組体操は学習指導要領にもない」と言うのが適切です。むしろ、安全教育の観点から批判すべきだろう。この後、市教委からも同様の通知がなされ（H28.4.25）、組体操を行うには報告書の提出が求められたのでした。（内田氏の主張は、組体否定派の論拠となっていますが私は賛同できません。）

更に、これまで組立体操の講習会まで開いていた教育委員会が、組立体操をするのであれば報告書の提出を各学校に義務づけました。春の運動会が多い奈良市では「こんな状況で事故でも起こったら大変。組立体操は止めよう」と中止する学校が出てきました。香芝市でも組立体操をするのであれば事前の報告が必要となりました。こうした一連の流れが、組立体操、組体操自粛ムードを作りあげてしまったのです。

⑥ 組立体操の自粛ムード

この通知が、完全に組体操自粛ムードを作ってしまった。春開催される学校が多い奈良市や生駒市では、これを受けて今年の運動会から組体操を外した学校も出て来ました。組立体操を巡る様々な論議が、子どもの安全を考える契機になったことは大きく評価できます。しかし、「報告書を書くのはめんどろだし、事故が起こって何か言われるかもしれないから止めておこう」という、学校を取り巻く事なかれ主義に対しては大いに疑問を持ちました。「巨大化・高層化を目指さない組体操だってあるはず。それを目指そう！」「組体操ではなく、組体表現を！」と言うことで報告書を書くことにしたのです。

⑦ 骨抜きにされたしまった報告書

報告書は、全体計画（目的・実施内容・実施技等）、指導計画（練習予定等）、練習プログラム（技の練習方法、技のポイント、留意事項等）、補助の仕方、教員の配置計画（練習期間中、当日）、保護者への説明等、事細かに項目が設定されていた。書くことによって、自分たちの目指す「組体表現」像が明らかになることにもつながると考え、積極的に文書化しようとした。私が強調したかったのは、子どもの安全を第一に考えることは言うまでもないことだが、上からの通知や書かなければ実施できないような報告書は、組体操自粛ムードを起していること、事故の危険性がある巨大ピラミッドに代表される組立体操だけでなく、組体操までも否定してしまう風潮を作っていること。中学校の組立体操と小学校のそれを一色単にしないこと。そこに教育委員会は気づいてほしいということだった。しかし、「言い方を柔らかくした方がいい」とか、「過激な文言を控えた方がいい」とかの校長からの注文が付いて、一番言いたかったことが伝わらない中身となってしまった。何度か書き直しをさせられて、結局骨抜きの文書が送られてしまうことになってしまった。この文書自体、校長名で教育長に報告する文書なので、校長の推敲が入り、教委の姿勢に意見するという部分が完全にカットされてしまったのだ。また、県教委の通知にもあったように、殊更組体操と学習指導要領との関連づけをしようとしていた。「教育委員会様、組体したいので、どうかさせてください。お願い!!」のような中身になってしまった。

⑧ 求める「組体表現」とは

2016年、当時の6年の学年では、夏休みから組立体操についていろいろ話を重ねてきました。例えば、巨大ピラミッドについてです。高さという安全性の問題もありますが、そもそも顔も見えない技ってどうなのか？また、教師が補助に入らなければならない危険な技を果たして行う必要

があるのかどうか。このような視点でよく行われている技を点検して行きました。そして、高さという見栄えよりも、同調（シンクロ）という見栄えに重きを置いた組体操＝組体表現を目指すことにしました。（この話合いは、演技構成に生かされています。例えば、「フラワー」という同心円になって行う演技があるのですが、中心で支えていた子ども達は内側を向いているので、全く顔が見えません。そこで、演技の最後に、誰なのかわかるような工夫もしました。このように、演技構成を行う技の一つ一つについて、検討して行き、高層化、巨大化を目指さない組体操（組体表現）を考えたのでした。

⑨ 組体表現の手立て

高層化・巨大化を目指さない組体表現は、従来からありました。技は難しくなくても、瞬間の隊形や全体での形づくりによって、技を集め演技を構成しました。指導の手立てとして大切にしたのは次の二点でした。

- ・子どもが不安を感じたらその技は止める。
- ・子どもがやらされていると感じたらやらない。

運動会の練習は組体操に限らず、ダンスでもほとんどが教師による教え込みで行っている場合が多いです。そうではなくて、体育の学習にきちっと位置づけようとし、組体表現のノートを活用しました。絵入りで、技のポイントを示し、上げる時の足の位置や力のかけ方、かけ声のかけるタイミング、体のどこに足を置けば相手は痛くないのか、どのタイミングで下ろせばよいのか、いつまで力を入れておかなければならないのかなど、指導の要点をノートに示しました。

また、学習の前半では、組体実行委員を組織しました（各クラス2名）。事前に練習し、技のポイントについて示範させます。その際、安全な組み方、かけ声の仕方などを教えました。学年の練習の際には、見本になって活躍してもらいました。

2人技に挑戦しよう 組体表現 その② 月 () 日 ()

6年 組 () 班 (名前) ペア・トリオ ()

今日の学習

- 1人技の順番を覚えよう。
- 2人技に挑戦しよう。(前車～サボテン)
- ・安全な組み方、ポーズの取り方、おろし方を知り、技を完成させよう。
- ・自分(たち)ではできなことが分からないので、グループやペアの友達に積極的にアドバイスをしよう。

(1)準備運動 毎時間組体操の初めに行います。

①「おこちゃんがおこった」10回

②「アンテナさん」10回 アンテナさんがビーン～おー～しー

「フー」で頭を入れる。「ハッ」で頭を出す。

「腰にしっかり手をあてる。体を少し反らせる。」

(2)一人技 技と順番を覚えよう

技のできばえ(◎○△×)	自分の注意したい所について書きます
①波を作る	
②両手をあげて半転～伏臥	
③伏臥から右に回って仰臥	
④V字バランス～逆腕立て	
⑤肩倒立(アンテナさんがビーン)	
⑥肩倒立～ジャンプ～ポーズ	
⑦片手バランス(右手～左手)	

(3)2人技の技のポイント (前車～サボテン)

前車	サボテン
 <p>腰や背骨を痛める 正しい上げ方</p>	 <p>おろすとき ひざを伸ばし、腰を曲げ、正しい持ち方</p>
<p>【学習のふり返り】 技の完成度は？(◎○△×)</p> <p>●おこちゃん () アンテナさん ()</p> <p>●ペア・トリオの () へ</p> <p>◎感想</p> <p>●は先にペア・トリオの人が書く→わたす→◎は本人が書いて、先生に提出。</p>	

⑩ 組体表現を終えて

練習が始まったころは、失敗も多く、できない技がほとんどで、「果たして大丈夫？」と思ったものでした。それが、しっかり学習を積むことによってできるようになり、また、メンバーを自分たちで入れかえることによって、できるようにもなりました。この辺りはさすが6年生だと思いました。練習の過程で、出来なかったことが出来るようになったという実感は、どの子どもも得ており、この辺りにも組体表現の教材価値があるのではないかと思います。運動会本番の組体表現では、ほとんど失敗なく行うことができました。難しい技でなくても、同調（シンクロ）の美しさを観てもらえたのではないかと思います。

⑪ 組体操、その後

6年前に八尾市で起こった組立体操の事故から、組体操バッシングが顕著になりました。「子どもの安全のために・・・」それは最優先すべきことですが、だからと言って、組体操をなくしてしまえという主張は大変乱暴です。組体操の可能性を見いだすでもなく、「ケガをして文句を言われるくらいなら」「報告書が面倒だから」つまらぬ理由で、組体操を行わない学校が増えているのも事実です。このような状況はおかしいと、組体操が好きでもない私が取り組んだのが2016年度の組体操（組体表現）だったのでした。

⑫ なぜ巨大化・高層化に至ったのか

最後にこのことについて考えてみたいと思います。「できたら子ども達の力を少しでも伸ばしてあげたい」－多くの教師は常にそう思っています。また、同じするのであれば、昨年と同じ演技構成をするのではなく、できれば前年よりも良いものにしたい（二番煎じはやりたくない。）と考える教師も多くいます。更に、今や学校が評価される時代になり、より見映えのするもの、より人を惹き付ける組体操が求められるようになりました。実践の可能性を広げるという点では、望ましいことですが、それが巨大化・高層化目指す一因になったように思えます。子どもの安全を考え、「無理ならや

める」そんな当たり前の思い切った決断が組立体操に限っては特に必要とされるのではないかと思います。つい子どもに無理を求めてしまうのは教師の悪い癖です。

また、組立体操問題の根底にあるのが教育のマニュアル化です。簡単に手に入るネットの動画、DVD—これらは実践を丸ごと学ぼうとしない教師を作っています。更には、子どもの自治を大切にしない運動会の在り方も問題でしょう。それらが凝縮した形で、組立体操事故に繋がったと考えるべきでしょう。運動会、教育を巡る病巣が解決されない限り、組立体操問題は解決しないのではないかと思います。

以上、「組体表現」に至る経緯を述べました。

4. コロナ禍で、組体表現から体育発表会へ

2月の終わりに突然の休校宣言がありました。3ヶ月間の休校を経て、6月からクラス全員での授業が始まりました。マットダメ、跳び箱ダメ、ふれ合う器具は一切ダメなど、学校で配慮したら良いことまで、市教委によって全てが決められました。コロコロ変わる市教委の判断に学校は振り回されました。校内でも、管理職や教務が事細かにルールを決め、全て揃えようとするのにも辟易しました。

一学期の終わりに、運動会の代わりに「体育発表会」を行うということが決まり（決められ）、土曜日午前中の開催となりました。2学年合同で3部に分かれて行います。時間的には、1学年あたり20分が割当ての時間となりました。

もし、コロナがなかったら、組体表現を行ったと思うので、限られた時間の中で、やりがいがあった、形として残るものはないかと考えた結果、「集団マット」を選びました。他学年は、リレーなどの競技を2種目行ったのですが、6年だけは4クラスで「集団マット」の演技をすることになりました。これが保護者の批判の対象となります。

それは、近隣の学校が入場を2名まで認めているのに本校では1名しか認めておらず、それに対するたくさんの苦情がありました。そのついでに、「他学年はリレーなのに何故しないのか」と、「集団マット」が槍玉にあげられたのです。まあ、損得で考える保護者も保護者なら、こういうことは予想できるのに足並みを揃えない校長も校長だと思いました。本筋とは関係の無い「集団マット」までがとぼっちを受け持った感じでした。何度となく苦情電話をもらいその度に説明して理解を得ました。先行き不安な「集団マット」の始まりでした。

5. 「集団マット」の演技づくり

一方、子どもはと言うと、ほとんどの子どもが経験したことのない「集団マット」なので、大変好意的に受け止めてくれました。もちろん、リレーをしたかったという子どもはいたのですが、「リレーならいつでも出来る。体育発表会で「集団マット」という作品をみんなで作ろう」という話をすると、全て受け入れてくれました。外野はどうだっていい、子どもがやってよかったと思える演技を作ろう、その助けになろうと、大概いい加減な教師でここまで来たのですが、この時ばかりは心底そう思ったのでした。

指導経過（全 18 時間）

クー クラス練習（2クラス合同で体育館の2カ所に分かれて練習する。） 全一 全体練習

時	学習内容	
1	側転の復習、側転を含む3連続	8/31 ク
2	側転(ホップ側転、ロンダート、片手側転)	9/1 ク
3	マット4枚(4コース分の演技を考える)	9/3 ク
4	面の構成	9/7 ク
5	1グループ(5,6人)で、4コースの演技を考える。	9/8 ク
6	練習→修正	9/10 ク
7	2グループ(10~12人)で、演技を考える。練習→修正	9/14 ク
8	クワリング系の練習→修正	9/15 ク
9	クラス演技の完成	9/17 ク



2クラスごとの体育館練習（奥はマットで、手前はスポンジ板で練習）



10	全体練習(クラスごとの見合い)	9/23 全
11		9/28 全
12	通し練習 演技の修正	9/28 ク
13	美しい演技に	9/29 ク
14	演技の見せ場づくり	9/30 ク
15		10/1 ク
16	運動場での練習 準備～全体通し～終わり	10/1 全
17		10/2 全
18	体育発表会 (本番)	10/3 全



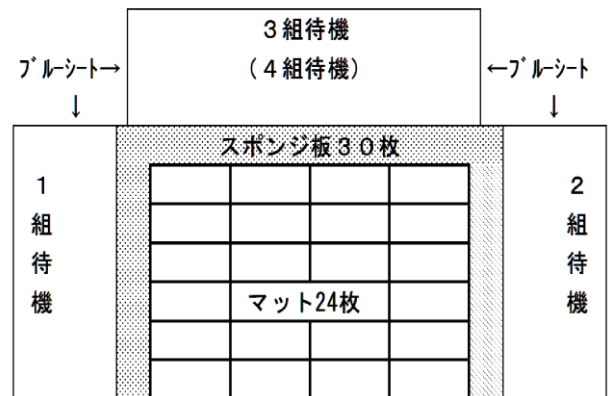
運動場での練習 (4クラス合同)

○構成／6人での演技→12人での演技→タンブリング系での演技→フィナーレと大きく4つの部分で構成。子どもは4回出場(演技)する。

○選曲／担任が選ぶ。私の学級だけが洋楽「Goliath／Smith&Thell」他のクラスは邦楽。

○演技内容／側転を入れた連続技を中心に演技構成を考えたが、多くは側転・前転(後転)がほとんどで、技の広がりは見られなかった。

○面の使い方／山内さんの映像を初めに見せて、いろいろな面の使い方があることを知らせた。しかし、この映像の影響は大で、最後のフィナーレは山内さんの演技そのものとなった。



※演技は4→3→1→2組の順

5. 体育発表会当日

運動場での準備は、①ブルーシート大3枚つなげたものを敷いて、周囲をペグで固定する。②マットのすべり止め20枚を敷く。③マット24枚を4×6に並べる。④マットの周囲にスポンジ板30枚(1m×1m)を敷く。



フィナーレの場面 山内さん(埼玉支部)の集団マットと全く同じになった。

6. 実践を終えて

体育発表会本番は、ほとんど失敗なく演じることができました。保護者からも好意的な感想をたくさんいただきました。自分たちの最高の演技をできた子ども達はとても満足していました。「集団マット」は良い教材だと思います。一つの作品づくりの過程で、子ども達は智慧を出し合えるからです。グループになって演技構成を考える姿は楽しそうでした。構成を変えたり、メンバーを入れかえたりして、よりよい作品に仕上げようとしていました。練習の過程で、出来なかったことが出来るようになった子どももいました。この辺りに「集団マット」の教材価値があるのではないかと思います。

コロナ禍で、「組体表現」のはずが「集団マット」になってしまいましたが、組体操の火種を絶やしてはいけないと思います。